

## 【書評】

木下麻奈著『折れない子どもを育てる』早川書房、2014年

駒澤大学経営学部 教授 中村公一

### ●「折れない子ども」がなぜ求められるのか？

本書は、多くの子供たちの教育に携わってきた木下麻奈氏の経験に基づいた子育ての指南書である。また、音楽的能力だけではなく精神面を鍛えることにも高い効果をもつ木下式音感教育法（以下、木下式）が、子育てにどのように影響するのかということも紹介している。子育てに関する本では、いかに優秀な子どもに育てるのか、いかにレベルの高い学校へ入れるのか、というものに対する世間の関心は高い。しかし、最近の世の中をみると、必ずしも学力の高さが「生きる力」にはつながっていない感じがする。学力的には優秀であっても精神的な病気になったり、一流校に入っても、その後の目標を見失い、定職に就かない者が多くなってきている現状がある。

一時期、ゆとり教育がクローズアップされたように、幼児・初等教育において、競争を避けるような風潮がみられるようになってきた。競争にさらされないで大人になった子どもは、社会人になってから大きな壁に悩むことになるだろう。ビジネス社会は競争社会でもあるので、そこではじめて上司に怒られ、取引先からクレームを言われ、社内での出世競争を経験するなど、嫌なことに直面することが多くなる。嫌な経験は、それをうまく解決していかないと、大きな挫折につながることもあり、そこから回復できずに病気になってしまう若手社員も多くなってきていると聞く。

つまり、人間が成長していくには、自分だけではなく、他人と切磋琢磨できる環境が必要である。そして、どんな状況に直面しても自分なりに解決策を導き出し、自分の置かれた環境のなかで喜びを見つけ出していく精神が求められる。これは、リカバリー能力（回復力）ともいえよう。そして、知的水準以上に、人間が生きていくうえで重要である精神を鍛練できる教育法が木下式であり、この教育法が精神を鍛えるということにどのように影響するのかということが、本書を読めば理解することができる。まさに、どんな状況でも「折れない」人間となる基盤を身に付けるためのエッセンスが本書にはちりばめられている。内容は、具体的に著者が接してきた子どもたちのエピソードが書かれているので、その場の状況が想像でき、とても読みやすく構成されている。

### ●木下式音感教育法のユニークさはどういうところか？

本書の前半部分では、木下式が開発されてきた経緯と、その教育法を幼少期から受けてきた著者の経験が書かれている。木下式は、ユニークな音楽教育法であるが、それが方法論として確立されていくまでの創設者でおられる木下達也氏をはじめ木下家の奮闘が感じ取れる。木下式の創成期の様子は、まるでベストセラー商品が生まれていくまでの開発過

程のような、試行錯誤の連続であったことが良く分かる。教育法に関する本では、その開発者自身が自分の経験や考えを記述しているものが多く存在する。一方、著者は実際に開発者から教育を受け、それに自身の体験というフィルターを通して、子どもたちに教育を行っている。木下式を幼少期に修得して、さらに子供たちにも指導している立場から書かれている本書は、1つの教育法に対して、学習者と指導者の両面から紹介されている印象を受ける。そのために、指導者サイドに立った多くの子育ての本のなかにあって、本書は珍しい存在であると感じる。

日本の音楽教育は、長い間、正しい音程で歌うことも、音符の読み書きも知らないまま、楽器を演奏するという方式を採用してきたと指摘している。また、音感能力の基礎がないまま、中学校に入るとブラスバンドに憧れて楽器を始めたという人も多い。つまり、音楽教育の現場では演奏力重視の傾向があり、歌唱力とは別物としてみられてきた。

これに対して、木下式は歌唱力を鍛えることが聴覚の発達にも大きく影響すると考えているのが特長である。聴覚が優れていれば、高い演奏力にもつながる。これは、読解力を鍛えれば、文章作成力が向上するようになるということと同じである。聴覚を鍛えていくために「音感かるた」が開発された。「音感かるた」は、見えないものを見えるようにしたことがユニークである。今まで、音楽の能力は、生まれ持った才能や育った環境が大きく影響するといわれてきた。「音感かるた」のユニークさは、音という見えないものを「カラー五線譜」という見えるものにしたことによって、生まれ持った音楽的才能がない子どもでも、教育によって音感能力を向上させることが可能となったことにある。

また、木下式の原点は「手作り」にある。それは、画一的な方法を一方的に提供しているのではなく、子どもたちの理解や成長を見ながら、教え方も変え、一人でできるようになるまでは丁寧に指導していく。例えば、授業を受けている生徒の数が増えると、一部の生徒は伸び、一部の生徒は落ちこぼれるという現象が起きる。授業内容を生徒のどの水準に合わせるのかで、理解度が変わるのである。この点を木下式では、同じことを懇切丁寧に教えても、一人ひとりの理解の仕方は異なり、それぞれに適した指導が必要であるという前提をとっている。つまり、確実な成果が出るような教育が実践されており、生徒一人一人に適した内容で教育が行われる。こうした方法は、大手予備校の効率性を重視した方法とは真逆のものであり、時間と手間はかかるが、着実に成長していくためには最適な方法である。

### ●子どもの成長に木下式音感教育法がどのように影響するのか？

木下式は子どもであっても妥協のない教育法であるために、全く知識のない人を見ると、過酷な状況にうつるかもしれない。その過酷さは、一番時間と手間がかかる基礎部分をしっかりと教育しているからであると考えられる。最近の音楽教育では、楽しさ重視の教室が多いが、それは子どもが楽しくなる部分を抜き出しているにすぎない。何事も基礎を身に付

けることは、今まではできなかったことであるので、単純な反復作業が必要となり、それを実行していくための精神力が求められる。木下式では、基礎部分の教育に重点が置かれているので、それが結果的に「折れない」気持ちを作り上げていく秘訣となっている。

また、多くの音楽教育では、その道のプロが自分の経験を伝えることが中心であったために、習っている子どもがどのくらい習えばどの水準に達するのか、あとどのくらい頑張ればできるようになるのかが良く分からないことがある。木下式は、多くの幼稚園でも採用されているように、体系化された方法論であるために、その途中経過が分かりやすいという面がある。つまり、一人ひとりの理解の仕方は異なるために、唯一最善の方法は存在しないが、方法論的なベースがあれば、それを各人に適した指導に変えることができという利点がある。

本書の中盤以降は、「0歳～3歳：心と脳をはぐくみために」「3歳～6歳：脳を鍛え、自分で考える子に」「小学生：思春期にあわてないために」「思春期：10代後半には目をはなせるように」という子どもの年齢別のアドバイスが書かれている。この部分のエッセンスは、常に将来を見据えて現在を考えることが必要だということである。今が良くても将来の状況が悪くなれば意味はない。木下式は、直接的な学力のアップにはつながるわけではないかもしれないが、人間の精神的な強さである胆力は確実に成長させることができる。胆力があれば、つまらないと感じる勉強でも前向きに取り組むことができ、学力を身に付けるうえで効果を発揮することができよう。

さらに、木下式ではルールの順守をととても重要視しているのが分かる。子どもだと、多少のことは大目に見ようとなるかもしれないが、木下式では自己中心的行動は許されず、1つのコミュニティとして形成されている。これは、幼稚園児でも親から離れて合宿を経験することや、自分が歌う番でなくても他の人の歌を聴く姿勢などに表れている。

## ●今の社会ではどのようなことが求められているのか？

大学生を教育している経験として、最近の学生は、与えられた問題を解決する能力は高いものの、問題を探し出す能力が不足していると感じる。大学受験までは、目の前にある試験問題の正しい答えを書ければ良いのであるが、社会に出てからは問題すら提示されおらず、まずは問題自体を探すことから始まる。こうなると問題解決のための知識よりも知恵が重要となる。カリスマ的な経営者であり、ビジネス界では賞賛されている松下幸之助や本田宗一郎という人たちは、必ずしも高学歴ではなかったが、常人には見つけられなかった問題を発見し、それを失敗しながらも解決するための情熱と信念で成功を導いた人たちである。つまり、何事にも折れない精神力によって、社会に画期的な商品を提供できたといえる。

これらのことは、木下式の目指す人物像と一致する。木下式では、自分で考えて判断するための経験、大きな壁に直面しても自分なりに解決策を導きだしていく姿勢の育成に力

を入れている。また、最近が目立つ成果を出した人物が評価される傾向があるが、一過性の目立った結果よりも、与えられた責任を地道に果たすことを重視している。子どもの頃から、やりたくないことはやらず、練習が大変だからといって途中でやめてしまうというような状況を続けて経験していけば、仕事が過酷な状況に陥った場合、途中で投げ出してしまうということにもなりかねないだろう。また、最初はできなかったことでも着実に進めていくことによって、できるようになっていったという経験があれば、大変なことでも粘り強く取り組んでいける人間になるかもしれない。

このように、最近の世の中で必要とされていることは、木下式の教育によって、その基礎部分は育成できる。受験勉強のような、成果に対する即効性はないが、生きていく上での土台をしっかりと育んでくれる教育法である。

以上のように、本書は木下式を幼少期から身に付け、さらに多くの幼児に教育を行っている木下麻奈氏の経験に基づいた教育観である。過去から現在に至るまでさまざまな教育法が生み出されてきたが、木下式のように時代が変化しても、一貫して教育法を変えないのは大変価値のあることである。楽しさ重視の教育が多くなっている環境のなかで、木下式のような子どもの本気を引き出し、能力を丁寧に引き出していく教育法は、異色な存在であるかもしれない。しかし、私たちの身の回りの日用品や食品などでも、良いものは昔から変わらないのである。木下式は方法論として確立された一本筋の通った教育法であるので、世の中の環境が変わっても、今のスタイルが継承され続けていくことができると確信している。